【資料名】　帰家日記　上（４３７諸家文書８—１１）
【年代】　正徳６年（１７１６年）戊申正月
【作成】　井上通女
【解説】

作成者である井上通女（１６６０年～１７３８年）は、丸亀藩朱子学派の儒臣井上本固の娘として生まれた。幼少より和歌を、１２、３歳頃から本格的に漢詩漢文を学び始め、１６歳の時漢文体の「処女賦」「深閨銘」を作り上げた。天和元年（１６８２年）２２歳の時に通女は江戸へ赴き、侍女として丸亀藩主京極高豊の母・養性院に仕えた。この時に、江戸行きの道中記「東海紀行」、江戸暮らしの記録「江戸日記」が作成されている。

そして、元禄２年（１６８９年）に養性院が亡くなると、丸亀に帰郷することになるが、その際丸亀行きの道中記として書かれたのが本資料である。行きの「東海紀行」と比べて帰りの「帰家日記」の方が慣れた様子で筆致が詳細とされる。資料中には１５首の漢詩が載せられており、当時女性でありながら漢詩の学を深くしたことは大変珍しく、その素養は著名な朱子学者らからも高く評価された。その他多数著作が遺されている。（令和４年１１月：松浦）

【翻刻文】

〈２—左〉
帰家日記　上
年経てすみしむさしあぶミ。さすかに
かけはなるゝ東路のなこりおしくかなしさ
を。かきあつめて見んもよしなしや。一とせ故君(こくん)の
おほせをうけ給り。御言の葉のふかきめくみ
によりて。身のつたなきをもおもひわりて
はるけき海山のさかしきをしのきてまいれ
る心さしをあさからす。おほしわきて御側(そば)
にのミあさ夕ならさせ給ひて。よろつに

〈３—右〉
御心をくハへておほしいたらぬくまなくいた
はりおほせらるゝをは。いかてかはいとゝをろか
にも思ひ奉らむ。いとになうたのミきこえ
奉りて。十(と)とせにちかき年なミの立かさなれ
るも。たゝきのふけふの心持そする。あくよな
うなれつかふまつりし御かけに。かく〳〵
俄なるやうにて別たてまつりしかハ。夢うつ
つのさかひもおもひわかたれすいとゝうき
身をようなきものにおもひすて侍るを。とゝ

〈３—左〉
まらせ給へる御子達御はらからをはしめま
いらせて有し御心にかなひておほしめしつる者
をとて。いとかたしけなくねんころにおほせま
つはして何事をも。おもたゝしきさまに
おほしおきてたるおめくみを見奉るに
つけても。なをきしかたのかへらぬむかし
となりぬるはかなさのミ。かす〳〵におもひ
つゝけられて。かきくらしつゝ過すほと。つ
き日のうつりかはりて。わかれ奉りしおり

〈４—右〉
のへたゝり行もかなしくおほえらる。おや
の年老ていとせちにこひしと覚ゆめる
ハ。けに周公(しうこう)の聖(ひしり)にてたに東山の三とせを
なけき給ふ。ましてをろかなる心のやみに
九とせの。久しきなかめもことはりに悲しく
て。古郷(ふるさと)をかえりミんとおもひなりぬるをとゝめ
まほしく。おもほしたる御かた〳〵の御心とものあさからぬ。御ことの葉のなさけも。かす〳〵
にわすれかたき。ふしともおほかれは草まくら

〈４—左〉
思ひたちぬる御なこりおしみまいらせんと。か
なたこなたによかいつかのほとゝおもひてま
いるに。今ひとひ〳〵とせちにとゝめさせ給ひ
て卯月のはつか比よりさつきのつこもりつ
かたまて。外にさふらふ。れゐ待せ給ふらんと思
ひ奉る主君もなけれは。家路わすれてをのゝ
えくたしけん人の心ちして帰たるを。こなた
にも独(ひと)り御心ほそくてなかめ給ふ女君。遅
りつと待うらみさせ給ふ。故君の御はかに

〈５—右〉
まいりて。是やかきりと御いとま申ほとのい
と悲しき物にも似(に)す。この御国にたに
侍りましかは。かくかひなき御跡(あと)にもた
えすまふてまいりて。なをそのかみおまへ
に侔ひし心地のし侍るへきを。女にてさへ

あれハひとつ心にまかせぬそかなしき
　あは雪のきえにし君か跡をたに
　きつゝみしとは思ひかけきや
　苫の下にあはれとやみる今ハとて
〈5―左〉
　かけはなれゆく袖のしつくを
　霊魂何処去遊衍　仰見蒼穹俯見泉
　今別高墳帰旧里　空留涕涙石碑前
たちかへるへき心地もせす。くらきよにまとへるかことくになん。頃日まいりしは。宗の君のおまへにてそありし。石川の君の御家にわたらせ給ふ御かたよりも。めせはまいりて日頃さふらひぬる。いつくも〳〵今ハと。かけはなるゝほとの御名こりを。おほしめしなやませたまふもかたしけなし。
〈6―右〉
侍らふ人々も袖引わきかたきまてぬらしそへ給つ。おなしふるさとにしたしきゆかりもたるなとハ。今一きは瀧まさるもおほかり。邦君の北方のおまへにけふのひるつかたまてさふらひて。なにくれとおほせらるゝ事ともつきせす。御そかつけさせ給ふほとなと。ゆゆしきまてこほれ落るを。御袖のうへにも露かゝる御けしき。いとかたしけなくみ奉る。御子達の日にそへてうつくしうをよす
〈6―左〉
けさせ給へるを見奉るにも。祖母君(うはきみ)のいかはかり大事とおほしかしつきつる物を。かく人ならせ給へるを御覧せさせたらましかはとおもひ出奉れは。いとゝわかれまいらせなん事あかす口おし。侍らふ人とに
　恩情何浅九年好　別恨難堪万里身
　想見帰家隔山海　月前相望涙痕新
　ふるさとにひとりかへらはしまつ鳥
　うきねをのミそ鳴わたるへき
〈8―右〉
おさなくよりつかふまつりて。かしらの雪となるまてかた時さらすたのミきこえまいらせし老ひと。それよりわかきものりの道に心さしあるハかゝるみきはによをうミのあまとなりて。心ふかくおこなひ居たまへるなとそ。ことにわらはか別をもかなしミ給ひてかゝるはかなきことくさをいひすて侍るを見ても。いとゝ苫の衣のたもとハかはきたにせす。心よはきけしきもあはれなり。そのほ
〈8―左〉
か日比おなしミやつかへにてなれむつましかりつる人々の。をのかちり〳〵行あかれぬるなと。俄にかくと聞ておとろき思ひて。出きたるそこらつとひて。とり〳〵にうしろミものしたゝめ。なにくれといとなミ出たまひたるいとうれしくたのもし。今宵ハかなたこなたと書をく文ともおほく。御哥の御返しなとつかふまつる。かしこけれハこゝにハもらしつ。夜ひとよしたゝめてあかつきかた。なこりおしとて一とこ
〈9―右〉
ろによりふすほともなくあけぬれハ。いそきおき出てたひ衣さしそきかへ侍るほと。かたミの袖の雫ハかきなかすも玉しゐの消る心ちすれは。其ほとの事とも皆とゝめつ。わらハをゐてのほかハ。おとうとの。ますもとなれハ。よろつにうしろやすくたのもしき事かきりなし。是も君のめくミによらすはいかてかは。また明はてぬほとにきてあないして。とくたち給ひねといそかし侍れとかみしものある人々むま
〈9―左〉
のはなむせすとて。さかつき出してとり〳〵に名残つきせすしたひ給ふめれハ。すか〳〵しく出もやられす。馬のたかくいはへたるなとはなやかに聞ゆる物からいとかなし
　昔是来時飛雨雪　旅人堕指望江東
　今将帰日苦炎熱　匹馬回頭斯暑風
　たひ衣わかるゝ袖に雲のなミ
　けふりの浪をたちやかさねん
女のひざうをいましめたまふなる。箱根今切
〈10―右〉
二ところの関とをすへきよしの御しるし。きのふ益本に下し給りぬ。元禄二年己巳夏六月十一日出たちて。とをきけるさとにとて。帰侍(かへりはへ)る。御門出るほとなと物もおほへすミなすたれのもとによりていとま乞し給ふ。芝(しは)のさと。しな川とかいふ。駅(えき)に出つ。しれる人々みつから送り給ふも有。人おこせたるもあり。うちつれていつる。あき人の家とも町たてわたし作りならへたるあたりを。打過ゆけは。海の

〈10―左〉
おもてはる〳〵と見やらるゝ。いとめつらかなり
おくりの人々にも。是より帰給ひねといふも。
又逢見る事も有ましくやといと名残をし。
ますもとに物きこえかはして。これよりみなか
へりたまひぬ。ひるつかたゆく〳〵うちねふら
れたるに。なを有し御かた〳〵の。御そはにさ
ふらふとおほえて打驚て。心はかりやかよふら
しの御ことの葉も。わすれかたく思ひやりまいら
せて。こなたをおほしめしをこせるにやと

〈11―右〉

　したひくる君かこゝろかとゝめこし
　わかたましゐかかよふまほろし

昼つかた立よりたるやとりいとすゝしけ
なり。おくなるおましに居て。とのかたを見や
れは雲につらなりたる海原。むかふさまに
たてみえて。けにするの松山をもこえつへ
く。浪のたちかへるなとおもしろくて。処に
すむ人さえにうらやましき。それよりいて
ゆけは。ちかき比さなへとりつらんと見ゆる。田面（たのも）に

〈11―左〉

みとりのいな葉。いとうるはしくまたほに出ぬ
ほと也。くさきる者の笠のミ見ゆ。田うたいとおか
しくうたふ。けになりハひのたやすからぬ
いとなミも。見ることにハ一しほにおもひしられ
て。素餐（そさん）のとがおそろし。又山きはにはたうつ
者の。身の色はすみのことくにて。汗（あせ）をしのこひ
たるあつさたえかたけなるは。夏畦（かけい）よりもや
めりとくるしきたとへに。曽子（そうし）ののたまひ
しけにもとおほゆ。今夜ハとつかといふ所に

〈12―右〉

やとる。海つらちかくならはぬ旅ねなり。まして
女くしたれは。ますもともいと心ことに。いましめ
ありきて。戸さしよくかためよなといふ。され
と今正しき道の末とをりて。むさし野の
草ふす風枝をならさす。よつの海静（しつか）におさ
まれるおりなれハ。しら浪のたちよるへきお
それもなし
十二日あけほのゝほとに。やとりを出つ

　露むすふ草の枕のかりふしに

〈12―左〉

　やかて明行しのゝめのそら

ふち沢より。さかみ河わたりて。大磯小いそを
過。浪のをと松の風にひゝき合ていと高く
きこゆ。沖よりしほ風のふきあけたると
いふ。こまかなるいさこ地にて。いとあゆミかたけ
なり。松の葉こしになみのよるなと絵にか
きたるやうにておかし。ひるやとる所大磯
なり。おやのかたき討てほゐとけたる曽我十
郎かはやく隙をうかゝふたよりとてかよひ
なしけん女とらと聞えしも此あたりに
すミけるとか語りつたふ

〈13―右〉

　大磯歌舞地　昔日各争妍
　虎媛其殊絶　十郎亦偏憐
　堕楼観名氏　宴席殆和田
　不是時宗至　使讎独戴天

〈14―右〉

夕かゝりてさかハ河わたる。いかなるにか水
まさりて。のり物もたゝよひなから。人あ
またかきわたして事なく心さすきしに
つきぬ。こよひは小田原にやとりぬ。此ところに
外郎かつたえし透頂香（とうちんかう）おほし
十三日けふハはこね山こゆへしとて。いと
とくまだ夜をこめておきつ。よこ雲たな引
ほと箱根山をこえかゝる。左（ひたり）も右もかさなれ
るミね〳〵そひえて谷ふかく落合（をちあい）たる水

〈14―左〉

の岩間を行なやミて。むせふ音なともおそ
ろしきまてにきこゆ。松柏いとしけりた
る。ふもとの梢（こすえ）より朝霧（きり）のたちわたりたる
を見るに。そのかミくたりしおりの面（をも）かけ
おほえて

　はこね山ふたゝひこえて見つるかな
　ふもとの霧のあけほのゝそら

のほりもていくほと。さかしくおそろしき
事かきりなし。むかしこえきたりし

〈15―右〉

跡ともおほえす。なつかしからぬあたり
なりや。年ふりにたる大きなるいはとも
家のことくにて。さし出たるも有。のほる所
はあふきたふれぬへく。下る坂にはまろひや
落（をち）ぬへきとあやうく。心をくたく事たひ
〳〵なり。つねのことハさにわらはへもいふ

なる。かしの木坂さるすへりとて。ことにけんしきは。けに猿もあしをとゝめかたくやとにみゆる。重き荷なと負(をふ)せたる馬ともいとゝ
〈15―左〉
あやうけにかはゆく見ゆ

　箱根山上幾峥嶸　古木回巌雲霧生
　地利自然如設険　人膽君徳共和平

はたといふ茶店にしはし立よる。山の岩ほを手(てう)水(す)ふねのことくしなして。落くる水をうけ入たる滝(たき)のことくなかれたる。いといさきよくみえけれハ。よりて結ふとて

　山水を手にむすひてそおもひしる
　　ひさこをすてし人のこゝろを

〈16―右〉
山の上なる湖水を見る。もと行かよひしはこね路とてさししめす。今ハ楊朱(やうしゅ)か哭(こく)しけん岐(ちまた)のことくにて。いとふかうにみゆめり。権現の宮とかいふ松の間にしろき壁(かべ)なと見ゆ。けふハさるへき日にや。ちかきみしまのあたりよりとて。人々おほくかしこにまふてぬる事道もさりあへす。水のほとりの河原に。石をつミてちゐさき塔(たう)のかたちに作りて。ねふつなとゝなふる僧有。地蔵堂(とう)二つ三つ
〈16―左〉
見ゆ。そこを過行て。せき所にいたりぬ。ありつる御しるし。益本もてまいりて。かくとあないきこゆるほと。輿(こし)たてゝ待つ。こなたへとて。番する所ちかくよせたれハ。そこなる人々老(をい)たる女よはせて。われもすさの女も。かれに逢へきよしのたまふなりと。ますもといふにより。たいめしぬ。髪筋(かミすぢ)なと懇(ねんころ)にかきやりつゝ見る。むくつけしなる女の。年老ぬれとすゝやかにて。いとあらましきか。ちかやかによりきて。た
〈17―右〉
みたる声にて物うちいひ。かへするもこゝろつきなくいかにする事にかと。おそろし。居ならひたる人々。老女にくハしく問(と)きゝて御印にたかふ事(こと)なしとて。ますもとに。関とをしぬるよしのたまふ。けにいつくもあやまりなしとおもふ物から。かくいかめしきあたりにたち出ぬれは。なをいかならんとむねつふるゝ心ちしつるに。いとうれしくて。人々よはせて過ぬ。峠にいたりて髪あけぬ。やゝ下り行坂に
〈17―左〉
なりぬるもうれし。みしまを過るとて明神の御まへにしはしやすむ

　誠あるこゝろはかりをたむくるを
　　ぬさとみしまの神やうくらん

今宵はぬまつにとゝまる

十四日明かたにやとりを出つ。家々旅人の朝たつけしきしるゝ。女とものたち出送るなとみゆ。馬とものいはへわたしたるに。のこりの夢もさめぬ。うき嶋か原に出て
〈18―右〉

　不二のねハ夏なき山か吹おろす
　　朝風寒しうきしまかハら

江戸を出てより日ことに見やらるゝ。富士の高根の。うすみとりにて。たくひなき山のすかたの。はるかに雲を出たるか。我ゆくかたに相むかへる。心ハかしとにのミあくわれつゝ。けふはいとちかつきもて行まゝに。はれ〳〵しくめをそらになして。時しらぬとむかしの人のなかめけん雪さへ。今もミゆれは。其よの
〈18―左〉
ふることもいとゆかし

　いつくよりふるしら雪のつもりけん
雲もおよはぬ冨士の高ねに
ふりかふるほとやきぬらんみな月の
もちにもちかきふしのしら雪

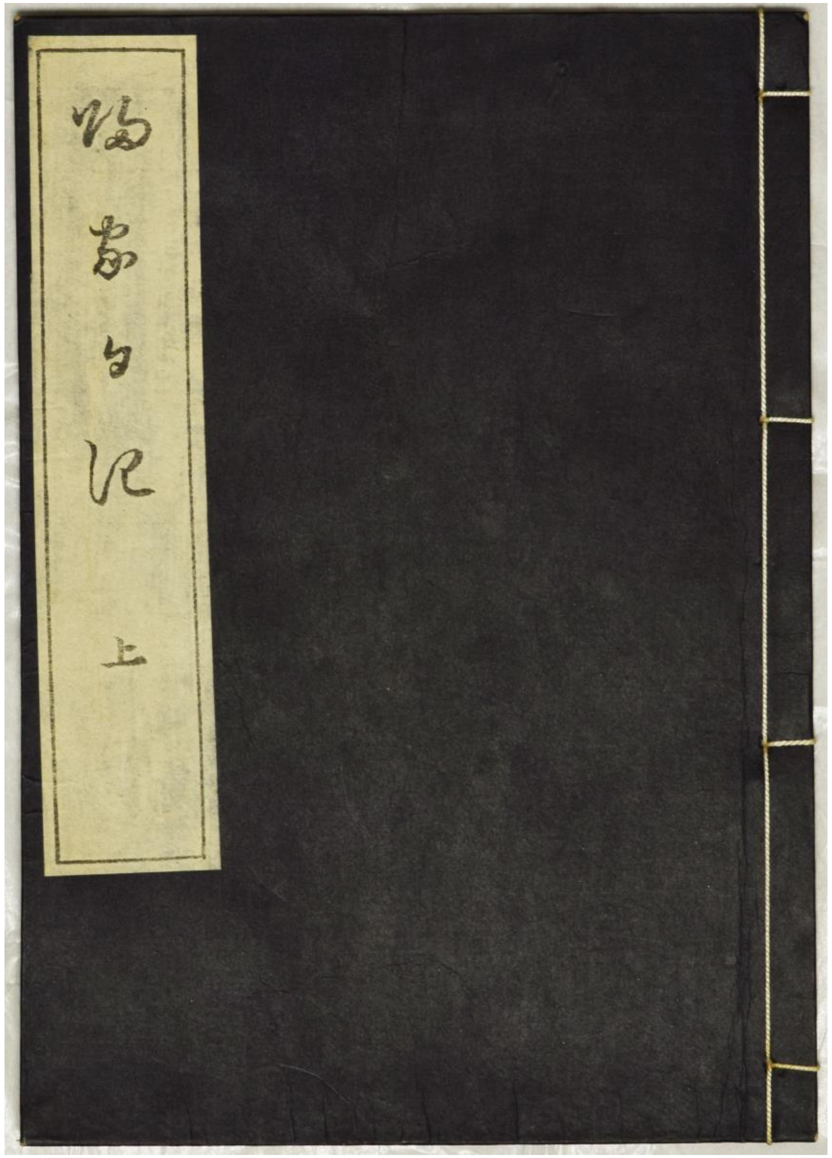
仰見七峯高倚天　雲端玉立徳容鮮
千秋雪色映東海　一抹烟光譲浅間
神秀豈争他列嶽　仙蹤猶在我危巓
郷人若問途中事　好把是山比聖賢

〈19―右〉
高ねよりこなたによこたはれるハ。あしたかの山といふかく名たかくはれ〳〵しきあたりに。いかてはひよりけんとおかし。冨士山神けくつし給ひたるとか。かたはになりてハたてるかひなくこそ。けふは日照ていとあつし
峯のことくなる雲。とをく見ゆめれとかけろふへくも明し

　やくかことくるしかりけりミな月の
　てる日をさえよ夕たちの雲

〈20―右〉
あしから山に雲のかゝれるも見ゆ
　よそにして過行せきの跡なれや
　　雲のミこゆるあしからの山
ふし河舟にて渡る。水いとはやくして
あやうけ也
　冨士河のみなきる浪ハ時しらぬ
　　高ねの雪やいまもとくらん
其のち又すこしちゐさき河をわたる。是
をとへハうる井河といふ。かん原ゆゐを過て
〈20―左〉
薩埵山をこゆ。中比まて此あたりこよなうけ
はしく。かたつかたハ壁のことく立たる山の。か
たつかたは海にて。たゝほそき道ひとつな
れハ人も馬もわつかに。ひとり〳〵ならて
ハとをりかたし。おやしらす子しらすとか
いひてをやこといへと相かへりみる事あたハ
さりしといふしかるをちかきよにこの山をか
くひらきたいらけさせ給ひて。よろつの人
のゆきかひたやすくなれるハ。道ひろき御
〈21―右〉
めくミなりかし。田子のうらにしほたるゝあ
まの家とも。まはらにあやしけなる戸口より
たち出て。磯辺になかめ居たる。しほ汲んと
にやと見るにさもせす。かいひろふにこそ。けに
さま〳〵いとまなきしわさもあはれなり。沖
津にいたり清見かたを過く。こゝはむかしの
人の心とゝめし。から歌やまと言の葉の。す
くれてたえなるおほけれは。中〳〵つた
なきことのはの見くるしからむをハ。打よす
〈21―左〉
る沖津なミもすゝきかたうやと。引こめて
たゝみし人の面影とめよとひとりことして
過侍るまゝ心のうちに
　いのちあれはけふ又こゝにきよミかた
　　浪たちかへる汀をも見つ
とそふとおもはるゝ。清見てらの門の前に
をろしたてゝしはしいこふ。ますもとよりき
て寺に入てみ給ひなんや。いとよき景気也
よし聞ゆれと。のほる事もむつかしけれ
〈22―右〉
は。此すたれこしに。わつかに門よりみいれ侍
のミ。むかひの家〳〵かうやくうる所おほし。
これよりなを山路をわけ行に。三ほのまつ
ハらはるかにミゆ。あまつ乙女の羽衣かけし
といふあたりもゆかしく。けにやま人もか
けりつへき所のさまなり
　山行直下海邉好　三保松原与浪連
　仙女羽衣空去後　斜陽掛処憶翩躚
　うとはまの殊〳〵は人にみえしとや
〈22―左〉
　　たつしら浪のまなくよすうらん
伊原川とかいひてちゐさき川をわたる。江尻に
いたりて宿をかる

1—左



此日記ハ讃州丸亀乃家士井上氏ノ女通子幼穉たつまより帰郷の旅之記なり
通子和漢の学に富ミ手跡又ハ和歌の道ニても勝れ仁義忠誠の道を志
女子ハすべて人に勝れたる事多し半途旅泊の間しより勤励をなし
これを此ころ上梓に梓して発し永く世に伝へんとおもふことなり

帰家日記

帰家日記上

年経くをみしむさしわたりにとゞまりゐ
かずそへれる東路のなごりをしきもかへるさ
とりわけわかくだんとよろしやうせ故郷の
地儀をしのびて御云の紫浪もはれわたりし
まりしよりはなれて。君れば住なれしむ所ひとつて
ちりきれ海山のはるけさ志のさそさいはと
なんおもふところなれ。たゞはしまさに御側
あのとあさ夕なるさまひろよろしう

にはかに入ておかしいとゝらぬ雨なくいとく
ちんゝ動かを移りしをはゞいうくかはいとくよろゝ
みとも思ひまゝせばいとまけりきぬときこえ
まうるゐ。だらせふちうた逢たことの立かさぬ也
あもぐもきぬふす母の心ばそとあれ。わくかる
うなれつゝふまいつゝしにか当りぬかまとく
儀なるやうゆく別きてまつりしこの八歩まる
いのほうひもらりひまうく経歩いとしれ
身をようすれ其のうしおり兆をとて候らんどそ

三 一

まうら旅人家御子達にもうかう成はしりかよ
のうせく前しにかみかあひてむけしめし待ゝ也
どうそげてかうし家移く旅人お行うかお伺をは
ゆらして何事しどもゞむりうてしききさまふ
あやしかさてきうのにめくみを去丸き候り
涙をそてもぐたゞばきしかさのうのるむひうし
みをなりぬるはうれさのゝかゆらくよねむひ
待てきうれし衣ゞかまくうしはまるをほとつ
きは日のようず加らうあゞ八つの喜にまうらしおうり

三 二

の庵にて日ころをかくしゝをわすれ侍る。さや
れる老かみにもさそはれしと思ひめくら
ハ。また圓光の霊まそこに東山君三とせを
たまはれるかはしてよろつ物ゝのやむふ
九とせれ。久しき身たにうちをおしとゝめまほしく
て。老卿をむかへりうんとおもひたちなとゝとゝめ
給へとも。ねかひしかる御いとまくたされけれ
わさかくし。けれとものことはなされけるうたし
まけるもかくれ。かくしもゆかりのもとに草庵をこ

昔そらかねられたまりけし兄乃いらせんとか、
なくこ給とみえけれ何かれはしにおもひのくま
いふに。今はしらくしとせらしをとめさせ給ひ
て卯月はなちつれまてさいまのはしめまつ
にまて。都をいてし給ふ。事なる給と給ふらんと思
日本のこと和をなん給ひて。都に思し給て
えらてしきん人のなりしか帰そうくとおもひて
みを独りけんかそくてなまり給へ女君。達
子供とゝ給しみさまり給ふ。故君のけんくへり

まゐりて。色やかをりとれいと白やかよはひ
ど越しさ抱みも似かよふの御噂みえに
侍りましかば。うくかひなき身れ待ちもらぬ
恐れまつく戸いりて。ただそのこのかんおまへ
小傳ひし仏壇のしのゝ人ゝ扇を。女もそれへ
わ待ハ御めいゝゐまゝり物ぬそこり何しきさ
わく香流き見てゝ君ゝの詮とそに
きゝ侍しゝ思ひのけにそや
暮のもと小いりてしてや今れ今はとて

かへるされおく神の志ゆくさ
霊魂何レノ處ニカ去テ遊行スル　御テ見ニ蒼穹ヲ俯メ見ル泉ヲ
今ハ別レテ高墳ニ歸ル舊里ニ　空ク留ニ滂沱ヘ石碑ノ前ヲ
そちかへる色よ仏壇をせん。ふれにふまへるか
つむくみなん。ほかおいりし。宗の元房おま
へおくそはりし。石川の君れ家ありわてるとかよ
れうさまりもめ。そはまいりてそ日頃さかりひぬ。
いはくをく今はと。かきてなおくほかの次第
と。おりしやしたやま給ゐまゐをかくしまし。

デジタル資料室　帰家日記

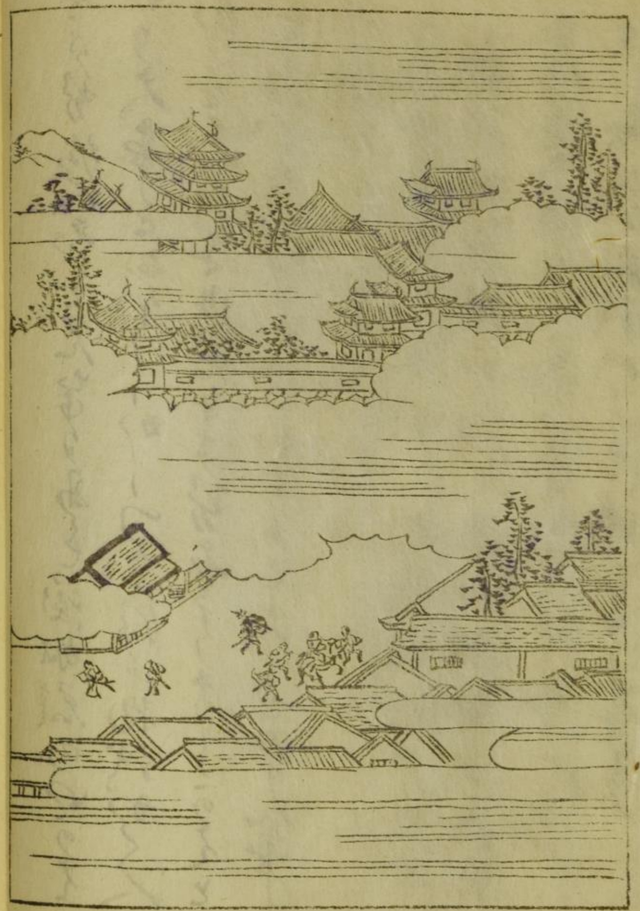
はゝ人にも神にわかれまてめくりし
老人はつはなし あさましくたまひしきゆゑに
とそろおもとは今一たび瀧本さまをお頼み
御君の御身のおまへにまゐりのおもひとま
ておもひなるなにとぞ事を願ひしとま
しも給ひけるに御手をかつきさせたまふにしもたまひ
ほしきまゝに涙に咽び御神の人をも
をしのけれども いかにしても見も
おほやけのはふさへ見まつるのも

きさらぎ給ひしかど見なれぬ身ぞ。御母君のいとのまへ
かゝり大事とおもはしからつきはる物語かく人
姉と共に人々の御送りをさゝげまうしつゞのまへと
おもひ出まつれば いとゞのまゝ申さる事
あら涙に袖しほり給ふ婦人にて

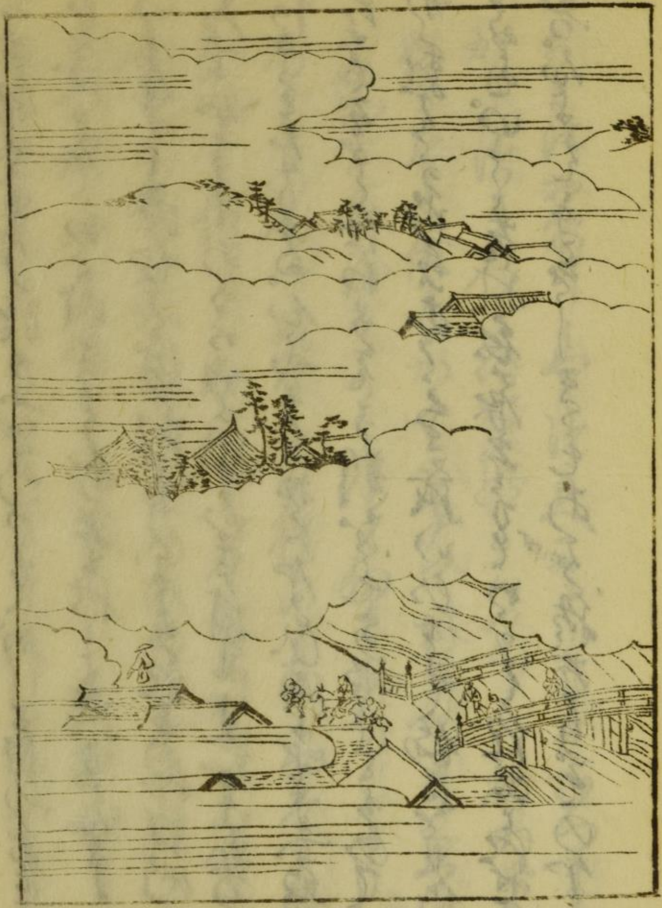
恩情何浅九年好　別恨難堪万里身
想見帰家隔山海　月前相望涙痕新

あるは心ならずもかへらぬ事をまつる
ふた程の程なく鳴わたる鳥の声

7—右



7—左



8—右

おさなくより詩をよみつゝまて。かゝる程の事を
なかまて。かつ附さへ寄学持ときこゆる
いつはし老むくゝ。それより書の紀をみり乃
人は心さしあるにかゝるみちは好まさりしを
何事も一なりける。むかふ事なく捨てなかし学業ます〳〵
なとえ。これはわりなく無別なりともおぼしゝえて
かく越たるの形は急とこさ絃いひまうて侍るをみえ
思ふにも。しかし書れ衣を勉まをかてかのゝ紀を学せ
書。紙もまた書きつゝもあつ様なり。その節

8—左

ある日は抑形しもや詩の人みちくなきむつまし
かり詩ある人まで乃。さは誹諧のみちくおはあくの色
好るなく。俳諧かゝる学でも侍りまた思はゞ
定めしき学海をそろく深く…すぐりにしかし
そのまゝの志めでめてたかれ。礼といふ事を出来まします
かいそう徳にして学みましく。人の貴いかなさま形さゝと
書を文にて抑によく修身の源とし。名を治めふ
まつるかつて人様々にいふかもし。詩歌もよくよ
志ゆめても何の川きかゝぐ。なりけり。それつまこと

旅ねより始まてほとゝきすもなきあき始きハいとゝ絶
物悲しくおもひまされハ又いとゝかきくれ
袖の露ハかはく方なく各の涙なん所なき
をそほとの事をも語らてやみぬるハ本意なく
のみ哀ハ相うとの、まほしく存して候ひし折ハ
かしこを過て今宵ハまつうたてしき事かきりなし是
も見ぬめやまあらしのこゑそかはまことに哀
ならぬにきこゆるかなしくていとく身にしみ
旅といひなから いまさらかくしそのあはれつもりま

乃なれむをきて侍りのおまゝかしこにとりくるま
しおさせ侍りしひかふめ給ハゞすゝしく
物を思ひきしあつる乃ありくいたへあるなと
されやうり字ゆる物かたりしも有けし

昔是来時飛雨雪　旅人堕指望江東
今将帰日苦炎熱　匹馬回頭断暑風

着ひ衣もくもりゝ神かけり雲乃なかき
たゝ香の涙をぬらすや行きし旅ん
女乃苦しさはいふかたなし先たちてみ行くる箱根今切

二ツ乃関をば無為に過して志那へ。我
於ふ無事其下し給ふ無為。元禄二年己巳夏六
月十日出立ちて京あり。我も後れ奉る事ならずとて帰路
る。御門出す。何となく物も打ちく書きそれ
君かくれよまれまくへど何心もし給ふ遠州浜松
志れ川といふ駅の出川。志まる人にて見付の
駅迄り給ふも有。八折の所あるもありぬ。ある
つきてばふるあきこ。濃路とも町まで来て
佛まで人がる何ら字まで申るゆかきえ。流

れりてうるくと見せうあく。ひてめつらしう於り
おもりぬ人々もあまたありとて給ひて、いふも。
又道すがらの事をまとしかやうにて書さく。
まれりふわさこそえうゝしく覚えしうみれう
絶りなうひ給。もろつてくゆるしくうち給つう
きのふのみたびよろしれゝくまんぱ桜くれさ
めぐみとおもひて打ゑるそんくくるゝや。かへすゝ
しれれこの紫をけとられかくく思ひやりまゐらす
そぞ心ならずおもひしやうてきる。あやこ

あさひさへ見つゝむけりとゝめらし

わりなき中しかゝけふもゆるし

見つゝきたよらとそなりやしきりいてとそしきを

なり。ちいくかるおほしみゆくところかれとさや

まだ夜明にはゝたらそる浦もいさ雨り

そらくみるこそ。見ゆる清の松山をとゝらんははへ

ゑ浪のそらかへおもしろしけくみゆかりし

えむ人さえりつゝやまゆきもとゆく

わもれて。ちりはさぬひとりつゝんと見えゆか。田(たのむ)

みちのの寄はてられしきまて河にも出ぬ

かもゝくさきら若のきみを見る。由にいとせつ

しそうそふれれなるとうひのそやあらう出

いたしとも。かくてれは一しおみなり礼をるを

て京(ここ)警(ぶん)法らずおそ終して山のはみえそり

若きん君のまへはすまんのはくもし。禅とへのひ

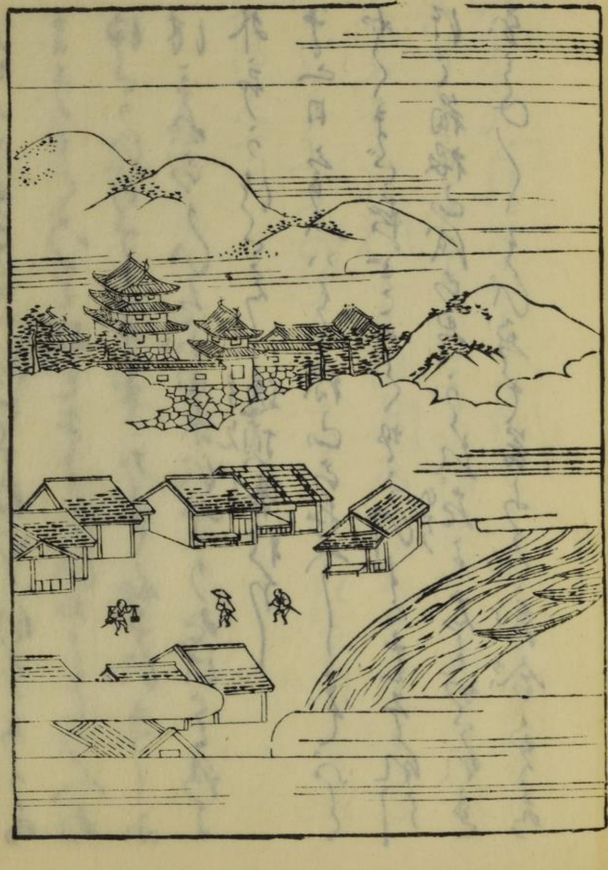
そらあつきたんりきをなしあそ。夜明りとや

かりとくみまそへり。背子法ねさまへ

しもれもしれも迎。今朝は河のとゆみあり

やすらふ湊つゝらくなしゝをは旅寝なりけりまして
女ともかくれ無きはゝとをいて心しられはやましわ
わかきさくらしくたかくかきわよなしとのみされ
こゝ今ふしさる君まちせ瀬のそひらし跡の
葉にかれ風枝をのこされとの波静かに残さ
まぬかるなりなれは志らぬ浪のうちらまさきされ
それかわし
十二日行あけのほしにやすらくを出つ
夜ひとよ草の枕のかさねしり

やうやう明行志ほ見えのこゑ経
ゆら沢ゝ寺けし見ゆわたりて大坂小川そと
色浪のおとし松の風よせて身合くいてこゝなき
きこゆ沖ゝ志ほ風のふかれあれすつ所
いふちよう行るいるゝ地あくいとゆきとかさを
おり松のゆふしまおきんのよろおもし給ふか
きこへる御つゝなくおしゆゝにまや申まし大坂
ならすやのかた時そはへるらけ夜ふるる秋十
郎かくやく陸をうし婦きらうとをそしかまし



なれきん女とられとやかんしも比わく梨ま
をこころとしこの詩作りける

大礒歌舞地　昔月各争妍
虎媛其殊絶　十郎亦偏憐
墮樓観石氏　宴席殆和田
不是時宗至　使讎独戴天

14
|
右

夕かたまちてそのいはにゐて。ゆるかなるかな
まさるとくるしき物とも思ひなりつ。人あ
はさのれわたし母事おもひわびきしか
ほとけおはしける小田原にやりぬ。此ほとりま
外郎のほとりにて透頂香もとめ
十二日けふは箱根山を越ゆべしとて。いと
ふかくまだ夜ふかく出て。よき雲もなく
ほど箱根山に登る。ひろうたるをわかれ
おりゆくゑびすて落合なる

14
|
左

のぼりゆくほどに行かふ人めづらしき
ほしきまでてりくるに。松花いとおもしろく
る。みちもそれより霧のけぶりもたち
をも見わたす。そのうちにうつしたるもの見事を
おぼえける
たゞ箱根山ふもとにひをまちつゝその
あまのまなごもゆる
のぼりゆきていくほどもなく
事この程季

15
右

此山こそ秋風見え高く、なかにのしかも殊にすくれ
なりけりや。是より入る大きなる門をたてられ
家居ども立並びたる所あり。坊舎の名は石
高山の楼門より寺の方へ坂道はじまる
とうき少し急にて、ゆけども石段つゞく事なし
くなりけり。僧の行いとこゝろに入たるに
物なし。所の不思議さをも見へたりと
まいりたる人もあらんとかくやうす
みかへる雲の気色など面白かりける

15
左

あやうきにかへりゆく道程

箱根山上幾ッ峰巒　古木四巌雲霧生ス
地利自然ニ如シ設タル險ノ　人ハ勝君ノ徳ニ共ニ和平ス

まさに茶店に志るし立てけり。山の岩根をたより
我る道ハ嶮しくしなして、落くる水をようと
へたり。滝の下をみれバ者のあなたにいとめざまし
よくみえ来る讀バよみて旅立して
山の上を見あげて人登る
報さこそ見まほしく人の心をも

16—右

山の上なる瀧水を見る。それより行てまよひし
たゝ杯流とそ申し左り。今ハ掛松の哭
しるん波ちよくみく。いと暗のうちまで谷々
の権現の若宮ハ、松の下ふもとの見廣
こうん遥やふハ清うへ家ゐ見やなゝれみしまあ
あつりよりもそ。へて行ほとかしこは岩々数
ある事たゝさり高く若木の陣きお院西栄
てぶん領清とてちいさき寺のかゝまり本堂て
て縁の門なとさかん本綾傍お地蔵堂二間二

16—左

又ん西。そこに残る五行ていせ孤の水くさり根あり清水
流る芋にし。ぢなそてかゝりて家なとしあかいき
こゆるれと。轟堂て、縁川お形とへよて。當寺
本願ち、のへよせ堂れハ。そこなる人て老尼安
まうせ立如。をまてそすゝくの女た。のことも尋へ来
よし掛て参ふなりと。自分ていふ五井よりたい
めし組。髪結好と聽なり方れやつて清く見ゆる。
むく清きしなる女の手老物語をすゝゆりふ
てぴとうちまししきつ。のちりやこのかよすまきて致

見ゆる麓まで物うちのべかゝれるもちつ絶つ
まかくい。のなれたる事ふ二のとをそ給ふしぞ有ける
らひ出る人ゝ。男女のなくみしを聞(とい)きてえ知るべし
昔の不破と。いそまてまてとに。関さ絶
絶るべし。けいまふ也ふいはくえ。なやまれ道
と聞山猿の名かくい。蘆しるわかりけり
高き御(?)根まであ(?)いふ(?)れん(?)も手涼(?)
並し(?)浪(?)をふいつくう神し(?)見て(?)人をよ(?)せて
見え(?)流れ(?)いつくりて髪わかなど(?)や(?)も(?)行(?)なり

夜のうき浪(?)しみし海をわたるとて所部
乃帝入まへりこえてめでたし
猿あるおくれ(?)のり彼(?)岸(?)むらし海を
如さとみし海の神やうを存ん
今宵は熱田川(?)のやどにとまる
十日明かたふやどりを出て。旅人の胡数(?)
川…しきこゆるく。女ども…見ゆる…
ゆ…見えいへ人わかし…るふぞりの夜もさあ
如う…の原より出て

十八

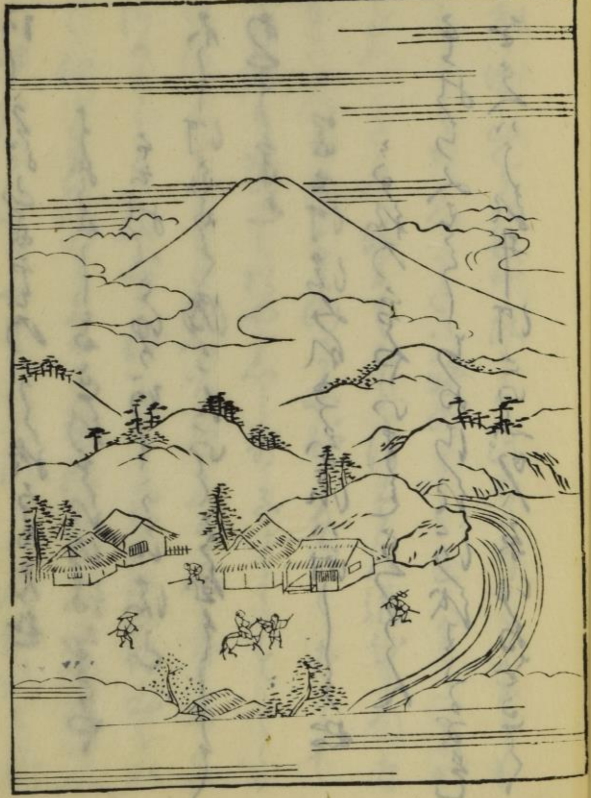
不二の根八重なる山の此方に
朝風寒しうら枯しころ

江戸をいでてより日ごとに見やりし富士の高
根の今日なみよりもちかく。むかひたる山の遠の
たえだえかかる雲を推はかるに。我ゆくかたに
おもかげの見ゆるはいかばかりの高さそびゆるにや
そはいとめでたきをつまづきとりながめむ
しくめ後に雅不明なる。時志るしとむかし
の人のおかしき霊夢今もなほ様ならねば

ゆくてもいとゆかし
いはくまりのかはしてうき雲れはりまさらん
あれもたよりに富士の高根
ゐまこそなるほとやきぬるかれれの
めちゆもちてたれしれのそてをし

仰見七峯高倚天　雲端玉立徳容鮮
千秋雪色映東海　一抹烟光譲浅間
神秀豈争他列嶽　仙蹤猶在我危巓
郷人若問途中事　好把是山比聖賢

19—左



19—右

されはよりきにはまさきやまのはれろはわしらぬ
山といふはくるしきのみぞおもしろくしきたり
よつてそのひとりもんと付てしぼう富士山祢け
くだしもひさけとこゝかしこにたなびきてはなぞ
なかめなくしてぞふるき日照くにとてとほし
景色なるをあやしくも見えくめのわたりてかゝる
めでたく見えけり

やすらふて名をしいつからきれ月の
こゝ日にまさる夕をとらへ夜やま

行しか、さつた山の雲のかゝる絶る事も見ん哉

よそにのみ見し高ねもけふそ見るふしの煙の雲や
雲ゐにかゝる行しら浪

不し河ふかく渡る。舟いとゝ急きしして
おそろしき也

富士河流みれハかゝる流ハ時しらぬ
さる私の舟やいましとまらん

又かち人をもしらねはそれにいかにもてなさし
を見ハ、松井河といふかん原ゆかむとて

薩埵山をとも越中侍まてはわるゝこそおそろしも
けしく、かゝるつゝくハ岩のもとくゐくるみち山きはか
高くあをうミあをてほとんと道もあらな
まハ人も馬も通ひかたきをなきしくなくして
いと狭かりしかは、おや子しゝもとくりか
いゝくとすなはちとゝまりて、ひとみたる事わさく
侍りしといふ、おそろしかりしにあの山をか
くあつかたいかなる事はしりのくにほのくりの人
のゆたかにひろをとくなれはかゝる所を行き御

先くしおもかりし。田子浦とかや志ほひなりけれは
まの出る海浦とかやよき中にすゝみ戸にまり
みちすくなく。旅ねせよとの給ふを。志ほ満んと
出やと見れはみさをきれ。かいのやうのはまへに
雨しく、いとゆかしきにもおもひ絵かきの沖
はふりなり清見かたは近くちてさむしの
人の心とゝめし。かの歌やまくらにそ尽きをも
られ南たんなる杜の絶えて、中々くはま
都も見しのにれとなり。かの世をいはせ給ふ

かの沖はなにもすくなかりけるやうにみえて
そをみつゝ人の雨気とおもはれしかりけれと
心ゆくまゝ心のうちに
いのちありてこそ又見にまかせはやと
思ひこちら人とあはれなる見れ
旅ぬかくおもひし御殿の見えて、それ門のあけり
それにおひて、まことに、いつれはしかりとあらさる
寺に入る。御み給日なんや。いしく候と京氣也
よしけふゆかことの給ふ事もなしつゝ有緒

しばしとてまちあふしみつゝふ門よりみのをは
のこし、ひの御ぐしかり、顔くされ所法し。
古跡ともなかば山路をまかり行ふ三保の松
ありける天女と聞わまりて女の羽衣かけし
といふ、かくありしもゆかしくきこゆれは人をとひ
尋ねは津々木の下に有り

山行直下海邊好　三保松原与浪連
仙女羽衣空去後　斜陽掛處憶翩躚

うなばらの流くもさ人まみえしや

ふるき清表まなこよしもろらん
伊豆の門このかくちるさ紀川をかける江戸
ゆふの紙の

帰家日記上終